

暮らしの豊かさを取り戻すために

地域協同組織研究会報告

〔要 旨〕

1. 本稿は、当研究所研究員および関係の学者をメンバーとして進められた「地域協同組織研究会」の調査研究報告の概要を、筆者の責任において取りまとめたものである。
2. 問題意識としてあったのは、地域社会の連帯感の喪失であり、地域経済の空洞化である。それを地域住民の暮らしの側から取り戻すには、どうすればいいのか。現代社会の政治経済の構造が「強者生存」の論理の追求である以上、このまま放置すれば相対的な「弱者」は圧殺されかねないではないか。
3. 協同組合は、地域社会を暮らしやすいものに、地域経済をより持続的で安定したものにするために活動する存在であったはずである。ことに農業という生命の根源に深くかかわる農協の役割こそ重要である。ところが現実の農協は、おしなべて、大型合併の背後で地域の生活を基盤で支える協同活動に弱体化の懸念が生じてきた。
4. 他方、各地、各地域で女性を中心にした先進的・先駆的な組織やグループが誕生し、独自で活発な活動を展開し始めている。これらの組織やグループの行方、そして農協等の協同組合の協同活動とのかかわりがどうなるのかは、地域社会の将来にとってきわめて重大な影響をおよぼす。
5. もうひとつ注目される動向に、地域通貨の拡大がある。地域通貨は、確かに失われつつあるコミュニティの回復と地域経済の活性化のために有効な手段である。しかし、それは同時に、地域通貨という手段によらなければならないほど地域社会の暮らしと経済がおとしめられていることを意味している。であるならばその構造そのものをこそ問題にしなければならぬ。
6. 地域社会の暮らしを真に住民のものとするには、分断された人々の関係をあらたな連携の輪で結び付けなければならない。そのためには、協同組合やその他の地域組織を軸とする連携の内部は、あくまで自立した個で満たされなければならない。ことは簡単ではない。暮らしやすさの回復のためには、構造への対峙は避けられないのである。

目次

はじめに

1. 失われつつある地域社会

- (1) 現代社会をどうとらえるか
- (2) コミュニティ喪失と空洞化する地域経済

2. 農協と地域社会

- (1) 協同組合とはなんであったのか

(2) 地域のなかの農協

3. 地域の再生, 暮らしの再生

- (1) 自立する生活者とその活動
- (2) 地域通貨の可能性と限界
- (3) 分断から統合へ, 細分化から総合へ

はじめに

当研究所では、地域社会の現実を暮らしの視点から明らかにし、地域社会再生の道をさぐるべく、「地域協同組織研究会」を設け、調査研究を続けてきた。

調査研究の方法は、文献、諸先行事例の分析、研究者・学者からのヒアリング、各地農協および地域の実態調査という3種の構成とし、この3者は同時並行的に行われた。

研究結果が網羅的で散漫になるのを避けるために、随時研究会メンバーによる討論を加え研究内容の深化を図るとともに、相互に問題意識を確認しながら調査研究の方向・方法を修正・整理し、課題への接近を試みてきた。

研究会の設立趣旨、メンバー、期間、方法等の詳細は文末に掲載しておいたので参照したいが、日々変化する生きた現実から遊離しないよう研究結果を導いてきたつもりである。研究成果は、すでに本誌で中間報告(2001年4月号)を行い、さらにヒア

リングと討論の記録はその都度刊行し公表(文末に一覧掲載)、またとくに地域通貨については別途報告書(農中総研調査資料13第1号)を作成した。

このほど、実態調査を終了し、最終討議を経て、およそ2年半にわたる研究会としての最終報告を取りまとめる段階となった。内容のすべては本年秋刊行予定の報告書によられたいが、その概要を、主として問題意識と明らかになった課題・方向性という観点から記して行くこととしたい。

前述したとおり、研究会は複数のメンバーによる討議を繰り返しつつ行われたが、本稿は研究会代表としての立場から筆者が執筆するもので、研究会メンバーの討議を経ていない部分があることをお断りしておく。

1. 失われつつある地域社会

(1) 現代社会をどうとらえるか

およそいかなる調査研究でも、問題意識と課題を設定するうえで誰しもが、そう明確に意識するかどうかは別にして、現在

我々が生きている社会はいかなる社会なのかをまず考えざるをえないであろう。もしそんな問いの外に身をおくのなら、多分その調査研究に着手するさしたる意味はない。いまさら言うまでもないが、いかなる科学も、人々の生活を豊かにし、その意味での文明の進歩をめざすものでなければならぬからだ。ある事象の周囲をうろろうとしていたような調査研究は、単なる手すさびにすぎないといわれてもしかたない。ひたすら自戒する。

さて、その現代社会とはどんな社会なのか。抽象的な言葉の遊びを排し、生きた現実の政治経済の枠組みのなかで考えてみる。

今、日本という国家体制のなかに生きる我々が置かれている大きな流れは、グローバル化・グローバルスタンダードであり、そして市場経済化、競争原理の導入と効率化であろう。しかし、その喧伝はいったい誰が何のために行っているのかを考えてみたい。そしてその流れの本質とそれが人々の暮らしのレベルに真に資するものなのかも。

なにごとにも当然のごとく前提してはならない。巨大な権力による情報操作は、その流れが一方向的に善であるような幻想を与える作用を持つ。しかし、自らが参画していないところで語られる方向には、一定の批判と拒否の姿勢であらかじめ防衛してからかかるのが賢明な態度であることは、幾多の歴史が教えている。

現在推し進められているグローバル化

シオンとは、アメリカを中心とする世界秩序のより明確な推進であり、グローバルスタンダードとは、あからさまに言えばアメリカ化、アメリカンスタンダードとほぼ同義である。そしてその内実である市場経済化・競争原理の導入とは、活動の自由を保證するとの美名のもとでの、マネーにものをいさせた巨大資本の市場席卷・支配にほかならない。

一国の社会経済が閉塞状況にあるとき、海外からの変化の兆しは、無批判的に受け入れられがちだが、「自由主義国」アメリカ化は強者をより強者にといい論理であり、ごく一部にさらなる富の集中をもたらす、という方向を内包している。状況に身をよせるのは愚かである。錯覚は誰でもが強者になれると思うこと。そして忘れてはならないのは、富の集中の背後で、収奪される資源と人々と国家とがあることである。環境破壊、生態系破壊に典型的なようにすでに地球そのものの存続すら危機に瀕している。何の留保条項もなしのグローバルスタンダードはきわめて危険であると言わざるをえない。

むろん、世界経済のなかでわが国が孤立することは許されないし、国際的な流通・決済が日常的に行われている以上自己の殻に閉じこもってもいられない。しかし、だからといって自国の独自性、特殊性を捨ててもいいということにはならない。人々がよるべきは、「マネー」ではなく「英智」、そして思うべきは世界レベルでのあまりの貧富の差。大きな流れの本質を市民・庶民

の側で見極め、少なくとも後代に「負の遺産」を残すような愚は避けねばならない。

本来単なる手段に過ぎなかったマネーの蹂躪を許しておけば、個々人はマネーをめぐって耐えざる競争にさらされ、人間疎外を生み、そして相対的「弱者」たる地域経済はますます疲弊し、コミュニティは分断される。その結果はそこに住む人々の暮らしそのものをも破壊しかねない。

(2) コミュニティ喪失と空洞化する地域経済

では、この間の地域社会の現実を少しく検証して見よう。まず地域経済はといえば、地場産業や地域中小企業には、市場経済化のもとで巨大資本との競争にやぶれ、また不況と金融機関の自己防衛もあって資金の道を絶たれ倒産したところも少なくなない。また地域の衣食住を内から支えてきた農業をはじめとする第一次産業や商店も、おしなべてジリ貧状況に陥ってしまっている。少なくとも我々が足を踏み入れた地域ではそうであった。

いや、もっと根源的な部分で問題を生じている。競争原理なるものは、人間関係を利害の側からしか形づくれず、効率化するものは、それをのみ唯一絶対の尺度として弱者を切り捨て、あるいは置いてきぼりにすることになる。もとより、地域社会の互助、連携ないし連帯は捨て去られる。すでに核家族化し家族内部での多様性が失われ、それだけ地域との連携の幅が狭められてしまっている状況を上塗りする。

豊かさの源の人間関係は何の条件整備のないままの競争関係からは生まれぬ。人を人として存在せしめる地域文化、福祉、そして自然と地域と深く結びついた地域産業も効率のみではカウントできるはずもない。

このまま放置すれば、今まで以上に、皆がみな、より巨大なものに向かい、より「都市」に向かう。「地方発見」「地方再生」などとも、都市の側や権力者の側から語られるようなら、それはあやしい。多くの場合それは、現在の社会経済の枠組みをそのままより強固にしようという「政策」の現れなのだから。かつての「列島改造」「全国総合開発」「ふるさと創生」などが何をもたらしたのか、それで人々の暮らしの部分がどれだけ充足されたのか、考えてみればいい。いたずらな資源の浪費、荒廃と新たな過密過疎を生じただけだったではなかったか。しかも昨今の不況の長期化は、雑草の生い茂る「工場立地予定地」を散在させている。

地域社会の暮らしやすさとは、自らの近場の生活圏に経済的な一定の充足と発展の持続が約束され、声をかければ応じる手をさしのべる「関係性」が縦横に存在することのはずである。いまやその意味でのコミュニティの存在はきわめて影がうすくなった。

ましてや諸先進国に例をみない高齢化の加速は、コミュニティ喪失の危険性をより深刻にしている。高齢化社会を見据えた諸施策も現状に追いついていないのが実態

だ。いかに取り繕おうが、現代資本主義社会の「強者生存」の本質は、一人暮らしの高齢者や社会的・肉体的弱者にとって、いかに厳しい現実となって押し掛かっている。

2 . 農協と地域社会

(1) 協同組合とはなんであったのか

1995年にICAは、協同組合原則をおよそ30年ぶりに改定した。周知のように、第7原則は「地域社会への関与」で、地域社会の持続可能な発展のために活動することを協同組合の原則に加えた。人々の暮らしの拠点としての地域社会の現状を憂慮し、協同組合の役割の重要性を明らかにしたものだ。このことはわが国の協同組合にとっても重要な意味を持つ。さらにICAは原則と並び協同組合に関するいくつかの重要な定義を明確な形で示した。地域社会と農協のかかわりおよびその役割を考えるうえで、いや協同組合そのもの考えるうえでその定義を真摯に受け止めることから始めたい。いささか長くなるが、日本の農協の現状を検証する意味からも列記してかみ締めてみる。

まず協同組合そのものについては次のようにいう。協同組合は、「人びとの自治的な組織であり、自発的に手を結んだ人びとが、共同で所有し民主的に管理する事業体をつうじて、共通の経済的・社会的・文化的なニーズと願いをかなえることを目的とする」^(注1)と。そして協同組合の価値を、「協同

組合は、自助、自己責任、民主主義、平等、公正、連帯という価値を基礎とする。協同組合の創設者たちの伝統を受け継ぎ、協同組合の組合員は、正直、公開、社会的責任、他人への配慮という倫理的価値を信条とする」と定義する。そして協同組合原則とは、「協同組合がその価値を実践するための指針である」と明言した。

これらから学ぶものは多い。農協系統組織は整備に急である。組合員、地域、農業そのものおよび経営の重要な支柱である信用事業の環境の激変を主な理由とし、時代への対応を余儀なくされてのものだ。農協系統が志向しているのは、総括的に言えば大規模化と集中の道である。単位農協の大型合併と全国連への機能の集中という対応が選択された。確かに一定の規模、一定の集中的機能を保有しないがために、組合員の要求を満たせず、事業と経営を不安定としている農協がないわけではない。しかし、これだけ地域社会のコミュニティの基礎である共助と連帯の崩壊の危機が叫ばれるなかで、その動向を自らの問題としての確にとらえ、協同組合として地域社会の発展を願い、その人々の暮らしを豊かなものとするべく活動する存在として自らを位置づけたうえでの大規模化の選択であるのか、もう一度問いかけてみるのも悪くない。地域社会における協同活動こそ実に協同組合を協同組合たらしめる基盤であるのだから。

農協の大規模化と機能の中央への集中は、すでに述べたようなわが国の社会経済

体制が目指している方向と見事に一致する。しかし原則と「定義」に照らして言えば、協同組合が真に組合員や地域住民のものとして機能しその協同組合としての役割を果たそうとすれば、何らかの小規模な協同活動を内包しない限り、大型合併ではその機能も役割も果たせず、自己矛盾をきたす。危惧するのは、大規模化と集中化が必然化させかねない小規模の切捨て、地域社会からの遊離である。そうなれば逆に地域社会から農協が切り捨てられ、農協は基盤を喪失するかもしれない。

(注1) 日本協同組合学会誌編『21世紀の協同組合原則』日本経済評論社、2000年12月所載の栗本昭記による。以下同じ。また下線部分は平井。

(2) 地域のなかの農協

我々は、地域社会の実態を探るために各地の農協の協力を仰いできた。大きく都市的地帯と農村地帯とに区分して実態把握に努めるべく、長野、岐阜、兵庫、広島、島根、福岡各県下の農協地域を調査してきた。時期はまちまちだがそのいずれもが、大型の合併農協であった。共通しているのは協同活動の希薄化、女性部等の組織の弱体化への懸念であった。調査農協はその地方、県下ではいわゆる優良農協と目されている農協であったのだが、その表情は苦渋に満ちている。そしてその多くが、現下の経営的な対応に追われ組織基盤の強化(ということは組合員と地域住民)に向けての運営のゆとりを失い、それを自覚しているがゆえになお、いら立ちと不安をさらけ出し

ていた。これらは「優良農協」だからこそ自覚しているのかもしれない。むしろそれと気づかない農協で進行する組織の形骸化こそ問題であろう。

こうした事実から考えるに、大型合併への手順のどこかになんらかの欠落があったのではなかろうか、そして大型合併が真にやむを得ぬ選択であったのだろうか(調査農協そのものを問題としているのではない、念のため)。合併の前に組合員や地域住民とともに地域の将来を徹底的に問い、地域の発展のために果たす協同組合としての役割と機能は何か、そしてそれを実現するための組織とはどんな組織であるのかを、ぎりぎりのところまで追究していたのかどうかである。当然にそれは行われ、疑問を呈することはすべて憶測に過ぎないのかもしれない。しかしもし、協同組合を中核とした豊かな地域社会を展望するなら、これらの検討は必須であり、回り道のようにもそして今からでも避けては通れない。

農協が地域社会に存在し、地域社会の発展と共にあり、農業も、地域そのものの発展と地域住民との相互理解がなければ成り立たなくなってきたことは、もはや論の外であろう。農協が農家組合員の農業だけを基盤に成り立つ、またそれが農協の協同組合たる所以であるとの考えは、生きた現実にすでに凌駕されてしまっている。

では、地域社会を生き生きとした活力のあるものとし、人々の暮らしを豊かで安定したものとするにはどうすればいいのか。その際一口に協同活動といってもどんな活

動が仕組まれればいいのか、また農協の組織活動として地域に広くその輪を広げるべきなのか、地域に存在する各種のサークルやグループなどのあるいは他の協同組織との連携をこそ求めるべきなのか、自治体との関係はどう整理すべきか、求める方向の選択は簡単ではない。地域の実態にまた農協の実態に応じて決められるものであろう。ただいえることは、あくまで主体は組合員および地域住民にあり、協同組合はそれらの人々の暮らしの豊かさと安定した生活の実現をこそ目的にしていることである。この点は、原則に触れて前述したことを思い出してもらいたい。

具体的な事例をひとつだけ紹介して参考に供する。大型合併ではおしなべて支所(ないし支店、以下同じ)の再配置という大儀のもと、特に「効率的」でない支所は廃止される傾向が強い。「効率的」かどうかをなんで計るのか問題なしとしないが、ここではそのことは問わない。いずれにせよかつての組合員の生活のまた心理的拠点であった支所を廃止する農協は少なくない。ところが、改めて支店(事例農協は支店)に権限を委譲し、支店に地域住民を含めた委員会を発足させ、自らの地域の活性化を組合員、地域住民、支所職員自らに立案させ実行させている農協がある。福岡県の福岡市農協の各支店では、綿密に立地条件と農協の経営条件を分析したうえで、各支店の特色に配慮した「支店行動計画」=協同活動を策定する、そして農協はそれを農協組織活動の基盤と明確に位置づけるという方法

で、もう一度地域社会の暮らしの再発見に回帰した。実際に活動を主導する職員がアイデアを積極的に提示し、意欲的であった点が印象に残る。

農協は多様である。地域の実態もさまざまだ。しかしもう一度協同組合としての自己を振り返り、協同組合は何のために存在するのか、何をなすべきか(なさざるべきか)、何をなさねばならないのか(なしてはならないのか)を謙虚に問いかけてみたい。

3. 地域の再生，暮らしの再生

(1) 自立する生活者とその活動

地域社会の活性化とコミュニティ確保のために、農協が有力な組織であることには変わりがない。とくに農村部では、農協の各種部会や組合員組織の存在が、地域社会において重要な役割を果たしていることには、異論のないところだ。しかし、地域社会の中核となるべき農協の協同活動にかけりが見え始めたことは、先に指摘したとおりである。加えて地域社会の変化と多様化は、農業者主体の旧来型協同活動では人びとの欲求が充足されないことを明らかにした。

その間隙を縫うように、各地で今、女性を中心に多様なグループや組織が誕生し、活動を活発化してきている。これらに参画する人びとは、生活者としての自立の道を模索しつつ、暮らしという最も根源的な部分で、地域社会の改革と活性化を目指して

信州うえだ農協で開催したワークショップ参加団体の概要

グループ名	会員数(名)	主要活動内容
JA信州うえだ女性部	2,474	健康教室, 共同購入, 自給と消費拡大
JA信州うえだ助け合いの会	1,023	身体介護, 家事援助, よりあい広間
JA信州うえだ東部町高齢者福祉ネットワーク	57	ふれあい昼食会, クリスマスプレゼント, 弁当配達, 介護教室, 講習会, 視察
武石村生活改善グループ協議会	18	生活技術交換会, ふるさとの味開発, 高齢者のための運転ボランティア
みのりの会	5	わらび採り, 豆腐・トマトケチャップ作りなど農産加工
ローマンの会	12	地域ぐるみの農業振興, 「おやき」など加工品販売, 野菜生産と直販
北條庵そば処	12	地場産のそば粉を使ったそば処の運営
味工房ゆらり	66	アイス, おやき, 餅, パンなどの製造・販売
クリエイティブ・グリーン	23	産消提携(生産物, 品物検討, 学習会, 機関紙発行など), 研修会
コープながの暮らしの助け合いの会上田たんぼ	330	家事一般・産前産後援助, 病院施設での介護

資料 参加団体から報告を抜粋して筆者がとりまとめ作成

立ち上がった。その分野は、食料、医療、福祉、健康、文化、教育など多様だ。そのなかで、生命の根源としての食への問いかけから、生産、加工、流通を通じて、地域社会の現状を学び、生活者としての生産者と消費者のネットワークを形づくる動きも生まれている。具体的な例を挙げよう。

我々は、信州うえだ農協の協力を得て、主として長野県上小地区を中心に活動する主要なグループと現地で意見交換する機会を持った(表)。

これらの組織設立の目的は、農業や地域の振興と活性化、安心して暮らせる地域づくり、相互援助と地域の福祉向上、食と農と命をむすぶよりよい生き方の発見、特産品加工開発を通じての産消提携、女性の地位向上といったものであり、地域社会や農村の現状を見るにつけやむにやまらず自ら立ち上がった。ほとんどが女性の組織であり、女性の行動力はすばらしい。

活動の内容の詳細は、紙幅の都合で明ら

かにできないので、表示部分をご覧いただきたいが、地域農業と暮らしの基盤からの活動は多彩で、女性の起業化までも展望されていて生き生きとしている。そして、意見交換の過程で、既存の農協の組織活動に飽き足らず、批判的意見がある反面、協同組合としての農協を叱咤・激励する声もまた強かったことを紹介しておく(このワークショップの記録は「地域協同組織研究会ヒアリングシリーズ第7集」参照)。

また、京都府大宮町地区のように、農協の支所廃止を機に、旧支所を住民が自主管理する「百貨店」に改組、ややもすれば見捨てられたかもしれない地域社会を見事に再生させた例もある。

さらに、島根県石見町では、「いきいきいわみ」という組織を中心に、多様なそして実に緻密な福祉のネットワークを住民自らが張りめぐらし、地域の暮らしを守り、高齢者に生きがいを取り戻した(同「地域協同組織研究会ヒアリングシリーズ第5集」参

照)

これらの組織はほかにも全国各地で誕生しているにちがいない。地域社会は生活の部分でじりじりと改革にむけて動き始めているのだ。

これらの組織が今後どのように発展するのか、相互にネットワーク化されるのか、農協や他の協同組合組織との結びつきはどうなるのか、などその行方はまだ定かではない。しかし、これらの新しい組織の動向と農協や生協などの協同組合活動とのかかわり如何が、地域社会の将来にとって重大な影響を及ぼすことだけは確かである。

(2) 地域通貨の可能性と限界

地域社会を語るとき、今ひとつ注目される動向として地域通貨の拡大がある。

地域通貨とは、法定通貨とは別に、地域内のみで流通する通貨（紙幣の場合もあるし、単に口座上のやり取りのみの場合もある）で、住民自身（多くはボランティア組織）が発行、住民間の各種のサービスのやり取りや商店街での購買への使用を通じて、共助と福祉と循環を回復し、地域社会を活力のあふれるものにしようとするものだ。わが国の地域通貨のサービスの内容をみると、買い物の代行、送迎、料理配膳、介護、話し相手、草取り、庭木の手入れ、犬の散歩、パソコン・英会話・写真指導などさまざまである。

これらのなかには、地域社会のコミュニティが形成されていた時代にはことさらの手段を必要としなかったものも多い。今日

では、近隣同士が手を差し伸べれば簡単に済むことすら、何らかの仕掛けの存在なしには不可能になった証でもある。これは程度の差はあれわが国だけに限ったことではない。だから、地域通貨導入地域の拡大と活動の活発化は、地球レベルでの地域社会の破局を象徴的に現しているといえなくもない。だからこそ先に述べたように協同組合の第7原則が加わったのだし、その真の意味は、あらたな社会経済秩序の構築に向けての人々の自立の喚起にほかならない。

ところで、この地域通貨の歴史は古く、大きな展開を見せたのは今から70年以前である。だが世界大恐慌下に増大したそのほとんどが、景気回復とともにそして国家の側からの圧力によって消滅してしまった過去をもっている。

地域通貨は、共助・連帯のコミュニティ再生、地域経済の活性化にとって、確かに有効な機能を持っている。まして、住民自身で住民の生活を卑近なところから守っていかうとする活動としての意義は大きい。しかし、繰り返せば、活動を始めねばならなかったのは、現在の貨幣経済に、経済のあり方に、そして社会制度のあり方に問題があったからである。であるとすれば、そのあり方そのものの構造を、地域社会の側から変革させることに地域通貨が繋がらなければ、さしたる可能性はないことになる。もし、構造的な問いを失い、地域通貨の会員間での活動で「自足」してしまえば、展望はない。ひとつの手段としての導入から、やがて学習を経て、さらなる変革に向

けて人々の自立をうながしてこそ、現代社会に一定の意味をもつのだといえるだろう。

(3) 分断から統合へ 細分化から総合へ
地域社会に住む人々は、精神的にも肉体的にも、あるいは食と農、あるいは職と住、あるいは教と育、あるいは政治と経済という形で分断されている。いつの時代でも情報の非公開とならんでこの分断こそ、人々のあずかり知らないところで進む支配の構図であった。

地域社会の暮らしやすさを考えるときまずは、この「分断」を絶つために意識してされる、ありとあらゆる縦横な住民の側からの「関係性」の復活こそが位置付けられなければならない。今ひとつ念を押しておけば、一方で地域住民相互の細分化された理解と協力と共感があってはじめて、持続可能なつまり「正の遺産」の連鎖による未来が考えられるのだが、そのままにしておくことはまた巨大な流れに抗する力にはなれない。ここでもそれを同時に総合化する関係性のなかに置いてこそ、「分断」から回復しうる。

そして根本にあるのは「自立」である。確かに、地域社会の現状を憂い、あるいは社会経済のあり方に矛盾を覚え活動を開始した組織やグループも存在することは紹介した。しかし、産消提携にせよ、生活者としての都市農村の連携にせよ、地域組織間のネットワークにせよ、その単位は不断の学習の内包による自立した個でなければ、状況の変化に耐えられないし、簡単に絡め

取られてしまう。思い起こせば「学習、教育」も協同組合原則に当初から変わらず掲げられている。

あくまで自立が基礎である。自立あってこそこの連携・連帯である。この関係は図式化すれば次のようになる。自立・自助 協働・共助・参画 連携・連帯である。

地域社会の自立した住民からのネットワークが大小さまざまに、そして縦横に自由気ままに張りめぐらされ、分断をもたらししている構造の回避に向けて収斂していったとき、初めて、地域社会は住民のものに取り戻され、地域社会は再生と活性化に向けて歩みだす。

地域協同組織研究会ヒアリングシリーズ

- 第1集「コミュニティ協同組合と福祉
イギリスを事例として」
明治大学政治経済学部教授 中川雄一郎氏
- 第2集「アグロ・メディコ・ポリスの可能性
長野県佐久地方を事例として」
近畿大学農学部教授 池上甲一氏
- 第3集「滋賀県環境生協の活動と地域のネットワーク」
滋賀県環境生活協同組合理事長 藤井絢子氏
- 第4集「イタリア社会的経済への旅」
長野大学産業社会学部助教授 田中夏子氏
- 第5集「石見町における多様なネットワークの形成」
「いきいきいわみ」会長 寺本恵子氏
- 第6集「地域経済・社会の現状とその再生に向けて」
千葉経済大学経済学部教授 安東誠一氏
- 第7集「地域における女性の主体的な活動に関する
ワークショップ 長野県上小地区を中心に」

(次頁に「地域協同組織研究会」設立趣意書(抜粋)掲載)

(客員研究員 平井 隆・ひらいたかし)

「地域協同組織研究会」設立趣意書（抜粋）

1. 目的と対象

「地域」に視点を置き，各種協同組織とその連携の実態をさぐり，農協の組合員組織に再検討を加えながら，地域における協同活動とその組織化の可能性を検証する。

2. 調査研究の方法

(1) 調査研究および研究会の運営

- a. 基礎研究部内のワーキンググループ（平井，根岸，大江，代表平井）が中心となってい，必要に応じてグループ以外からの応援を仰ぐ。

（注）後に重頭が参加。

- b. 本調査研究の全体の進め方や論点整理を的確にするため，内外の協同組織問題に精通する，中川雄一郎明治大学教授（日本協同組合学会会長及び協同組合総合研究所理事長）にアドバイザーをお願いする。

（注）後に田中夏子長野大学助教授および安東誠千葉経済大学教授も参加。

(2) 調査研究の進め方

複数の農協地域の実態調査および，問題点の理論的整理と明確化のための研究者・学者からのヒアリングで構成する。

具体的には，主として，農村地域を対象として

既存の協同組合組織の再検討

多様な主体による地域農業の活性化の実態

協同組合や，協同組合以外の各種地域協同組織の活動および連携の動向を明らかにする。

ヒアリング講師の候補者は

- a. 協同組合関係 現場関係者，学者・研究者
- b. 協同組合以外 地域経済，地域農業，地域資源，ネットワーク論等の各論点についての学者，研究者，行政担当者，現場のネットワーカー等。

(3) 調査研究期間

1999（平成11）年度 問題意識を共有する実態調査対象農協選定のための予備調査と，資料収集と文献解読等を通じた課題の視点と枠組みの理論的整理のための準備期間。

2000（平成12）年度 4月から本格的な調査研究に着手。

2001（平成13）年度 引き続き調査研究を継続。

2002（平成14）年度 年度末をもって終了とする。

以上